
アニオタのろーぶれわーど

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニオタのろーぷれわーど

【Nコード】

N8337T

【作者名】

ユウスケ

【あらすじ】

前世の記憶をもったオタクが普通に過ごしていた春休みのある日オタクはプレイしていた「ギヤスパルクの復活」のバグを好奇心から試していたらバグが偶然にも起動してしまった。ゲームの中に入ったオタクの運命は・・・。

この小説は駄文で作者の自己満足です。

プロローグ

プロローグ

ー 京介視点 ー

俺名前はいつくしま 敵島 京介、きょうすけ 現在大学1年生の18歳
アニオタでゲームオタ。

そして・・・俺は前世の記憶を持っている。

いや、別にネタじゃない本当にあるのだ。

正直始めは困惑した、だって車にひかれた後、自分が赤ちゃんにな
ってるんだ

誰だって困惑する。

その後は赤ちゃんライフを過ごしその後も普通に過ごしてきた。

特に何の事件もファンタジーな事にも巻き込まれず平和な日々を過
ごしている。

始めは何かチートがあるんじゃないかと飛天御剣流、無明神風流殺
人剣など家族がいないとき

ひそかに練習をしていた、練習の結果はさんざんで自分にはチート
がないと分かった。

それでも、体を鍛えられるし一応頑張ってきた。

まあ、半分は趣味だからおかげで現在まで続けて来れた。

もちろん家族がいないとき限定だけど・・・。

頑張った成果はスポーツなどに影響が出て小学生のときから体育の
成績はよかった。

もちろん前世の記憶を持っている俺は勉強面もかなりできていた。

おかげで神童なんて呼ばれることになった。

まあ、それもそのはず俺は前世ではオタでありながらかなり優秀な
大学に居たのだ。

これくらいは出来て当然である。

ともかく、そんな感じで学生生活をエンジョイしているのだがこの間事件があった。

別にフアンタジーや巨大な組織の陰謀とかそんなんじゃない。

大学の先生が人気のない所で女子生徒にセクハラをしようとしていたのだ。

俺はすぐさまその様子をケータイで写真を撮り。

俺の固有スキル、キャラものまねでセクハラ先生を止めた。

「な、何をするんだ君は！教授である私に暴力を振るうのかね！？」

俺が今にも女子生徒の丰满な胸に触ろうとする手を掴むとセクハラ先生は殴られると思ったのかかなりビビッている。

それもそのはず何故なら俺の容姿はるるうに剣心の比古清十郎を若くして筋肉がムキムキしていない感じになっている。

そんな俺が教授を睨んで腕を掴んでいるのだ、びびってしまうものしょうがないというものだ。

でもこの容姿のおかげか不良に絡まれたことは一度もない。

そして……。

「だまれ」

「ひっ！！」

名前は忘れた寡黙な悪役を演じてセクハラ先生をさらにびびらせる。このキャラものまね、根がキングオブチキンのおれが勇気を出せるスキル。

しかも、この世界には俺の大好きなアニメはないからものまねして

も中二病とは誰も気づかないのだ。

それにこれをつかえば、へたれである俺は動く事が出来るのだ。

正直、現実逃避や開き直りとさほどかわらないけど……。

この後、セクハラ先生の手を離し先程撮影したものを見せ、もうしないと誓わせた。

そして、女子生徒にお礼を言われお互いに自己紹介をした。

「わたし一年の渡辺^{わたなべ} 理沙^{りさ}よろしくね」

「俺は、巖島 京介だよろしく頼む」

お互い自己紹介をしたのはいいが彼女のけしからんおっぱいを見ないようにするのは大変だ

なぜならここでおっぱいを見たらせつかく勇気を出して助けたのに嫌われてしまうからだ。

俺はかなりの神経をすり減らし見事渡辺さんのおっぱいを見ずに、渡辺さんとメール交換をして帰った。

そして何通かのやり取りをしていたのだが、春休み前の三月十三日、渡辺さんと連絡がつかなくなってしまった。

もしかしたら単位を出来るだけとって家族で旅行に行ったのかもしれない。

俺も単位をたくさんとって春休みを普通の人よりも長くエンジョイする予定だったし別に問題はないだろう。

それに帰ってきたらメールぐらいくれると思うし。

まあ、何はともあれ春休みになってしまえば家族は弟以外なくなるそうすれば弟に気づかれないように

オタクライフをエンジョイできる。

なぜなら弟は俺と同じゲーム廃人だ必ず部屋に引きこもる。

だから俺がオタクであることに気づく可能性はかなり低い。

俺は意気揚々と自宅に帰りこの間から地味にプレイしている『ギャ

スパルクの復活』をプレイする。
よし、レベルもまだまだだから、これで春休みはかなり有意義な時間になるな。

そして3月20日の現在

「うーん47LVか、まだまだ先は長いな・・・」

弟より早く春休みに入った俺は現在ギヤスパルクの復活をプレイしている。

それにしてもこのゲームなかなかレベルが上がらない。

それでも頑張っているのだが中々上がらない、そしてふとあることを思い出す。

昔のゲームに100LV方法なるものがあつたことを・・・。

つまりはバグである。

このギヤスパルクの復活はまだ販売されていないテスト段階のゲームだ。

つまりバグが一つ二つあってもおかしくはない。

正直チートは好きではないが好奇心からやってみたいと思った。

なに上書き保存をしないで、リセットを押せばチートはなくなるし大丈夫だろう。

そして俺は昔ながらの方法を試した。

・・・・・・
・・・・・・
・・・・・・
・・・・・・

試した瞬間、画面が光窓を閉めたはずの部屋から、来るはずのない涼しげな風、

目の前に広がる草原。

「あれ？ここは何処だ？」

プロローグ（後書き）

これからも頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

1話 勇気の仮面

―京介視点―

おいおい、これは一体どういう事だ？

俺は部屋でゲームをしていたはずだぞ。

なのになんで草原にいるの？

とりあえず立ち上がるうと右手を地面について腰をあげようとしたのだが

右手に何か当たる、何だこれ？

感触からすると棒状のもの・・・俺はその棒状のものを拾いあげてそれを見つめる。

それは俺が中二病よろしく飛天御剣流などを練習するときに使っていた愛用の模擬刀だった。

始めは木刀にしようかと思っていたのだがリアルティを求めた結果、模擬刀にしたのだ。

つてしげしげと刀を見ている場合じゃないな・・・。

俺は立ち上がりとりあえず周りをうろろろすることにした。

もしかしたら何か手がかりがあるかもしれないと思ったからだ。

しかし、うろろろしても何もなく。

当てもなくプラプラと歩いている。

まずいな・・・俺、確実に遭難してんじゃん。

きやー！！！！

前方に悲鳴が聞こえた。

人がある！！

悲鳴ではあったが人がいるつまり近くに町がある。

俺は悲鳴の主を助けて、町に案内してもらおうと走り出す。

すると前には剣を持った赤い髪の女の子とでかいアリがいてアリは女の子を追いかけて

女の子は必死の形相でアリから逃げている。

おいおい、さすがに変態とか事故とかそんなんで悲鳴をあげていたと思ったのに

なんだよあれ。

さすがにこれは怖い、いくらなんでも俺に何か出来るとは思えない。勇敢に助けに出たとしても女の子と一緒においしく食われてしまうのがオチ。

俺はなんの力もないただのオタク。

幸い女の子は逃げるのに必死で俺に気がついていない。

俺は見なかったことにして、ここから離れようと動こうとしたとき。

ー恐怖を捨てろ

前を見る

進め

決して立ち止まるな

退けば老いるぞ

臆せば死ぬぞー

頭によぎるこの言葉、俺が大好きなアニメの一つにあった好きな言葉……。

そうだな……たしかに俺はオタクでチキンかもしれないさ……

でも、俺の知っているアニメ

キャラたちはどうだった？

所詮アニメかもしれない。

空想で誰かの考えた都合のいい物語で必ずうまくいくものかもしれない。

でも、彼らも怖いという感情と戦っていた。そんな彼らを見てアニメが・・・ゲームが好きになった。

主人公じゃない脇役もがんばって戦ってた。

それで死んだキャラがいたけど最高にかっこよかった。

俺は覚悟を決めて赤い髪の女の子が居る方を見つめる。

俺は女の子に向かって走り出した。

後もう少して女の子のところに着く、ちなみに作戦は模擬刀で一撃与えて体制を崩したところで

女の子と逃げる。

追いつかれるかもしれないが今はそれしか思いつかない。

俺は柄に手を掛けるがその瞬間女の子が転んで持っていた剣がてからすっぽ抜けて飛んでいってしまった。

剣で女の子が怪我をしなかったのは幸いではあったがアリが女の子を食べようと凶悪なアギトを少女に向ける

マズイ！！

「うっわ！なんだあれ！？モンスターか？モンスターだよ！つかキメエ！実際に間近で見ると

キモすぎる！僕、昆虫苦手なんだよ！地球防衛軍のアリの大群もダメだったし！ましてや、リアル

ゴキブリとかダメだからホント！」

なにか聞き覚えのあるマシンガントークが聞こえたが今は無視をする。

マシンガントークを聞いた女の子は天の助けと思えたのか声を張り上げて助けを呼ぶ。

「助けて！助けてー！！！」

俺はアリの前に立って練習してきた技の一つを繰り出す。

「飛天御剣流・・・」

ー天翔龍閃ー

抜刀するさい目をつむり一步前に出て本気で振り切る！

そして振り切ったはずなのに手ごたえがまるでない。

もしかして失敗したのか。

俺がそう思い目を開けると・・・

巨大なアリは横に真つ二つとなつて体液のようなものを撒き散らした。

うえ、気持ち悪・・・。

それにもこれ俺がやったのか？なんかこれはリアルな夢に思えてきた。

何故なら俺が持っていたのは模擬刀であつて本物ではないからだ。

気にはなつたが今はそんなことはどうでもいい俺は振り返り、転んだ女の子を見る。

女の子はボーっと俺を見ている、もしかして飛天御剣流とか言っていたから引かれたとか？

とりあえず、女の子が怪我をしていないか心配になつて質問をする。

「平気か？」

「あつ、はい！」

ようやく再起動したのか女の子は俺の言葉に反応した。

さて、町にでも案内して・・・。

「兄さん・・・」

聞き覚えのある声の次は俺と同じゲームオタの弟の声が聞こえた。
まったく、アイツは今頃ゲームをしているはずだこんな所に居ると
するのなら

確実にこれは夢だろう。

俺は声の主を見るため顔を向ける。

「なんで兄さんがここに？」

声の主は俺の弟、厳島 勇吾だった。

しかし勇吾よなんで頭に赤い棒や青い棒があるんだい？

それに棒の上にはご丁寧にユーゴだなんて・・・。

やっぱりこれは夢？ゲームのしすぎでこんな夢を見てしまったんだ
ろう。

そうでなければ俺みたいな人間が模擬刀であんな巨大なアリを横に
真っ二つなんて出来ないだろう。

まったくさっきの俺の覚悟を返せ！！

夢だとわかったんならさっきのはもったかつこよく倒したかった！！
なんて後悔しつつ弟を見て、俺も疑問を口にする。

「勇吾それじゃあお前はなんでここに居る？」

「俺は『ギャスパルクの復活』をプレイしていたらここに・・・」

なるほどこれがこの夢の設定か。

少し安直な設定だが夢なのだからしょうがない。

「あ、京介さん！京介さんもここに来てたんですか！？」

うおっ！このモンスター、恭介さんが倒したんですか！？それにこの子現地人！？NPC

ゲームの中の人？もしかしてイベントですか？恋愛フラグ立つんですか？」

さっきマシングントークをしていたのはやっぱりこいつか・・・。

宮本 翔、弟の友人で始めた会ったときテキトーに相手していたら懐かれた。

そしてこの男は変態だ、別に変な趣味があるわけではないのだが欲望にとっても素直な

男でかなり面倒だ。

俺は模擬刀を振って着いた液体を落とし鞘に収める。

「あ、君大丈夫か？」

俺のことをチラチラ見つつ女の子の心配をする勇吾いや・・・ユーゴ。

そして、俺はユーゴの持っている物に目がとまる、その手に持っていたのは女の子が持っていた

剣、もしかして近くに居たのは女の子を助けようとしていたからか？赤い髪の少女、頭にイシユラと書いてある。

おそらく子のこの名前だろう。

「大丈夫みたいです」

自分の体を確認め、大丈夫と言うイシユラちゃん。
さて、これからどうしたものか。

1話 勇気の仮面（後書き）

一話なのに短い・・・。

これからも頑張っていくので応援よろしく願いします。

感想まっています。

2話 勇気の仮面その2

ーイシユラ視点ー

私の名前はイシユラ・アローネ。

少し活発で毎日のように男の子と虫を取ったり走り回ったりしていた。

そんな私も今日で14歳の誕生日を迎えた、だから私は誕生日の記念として

モンスターを倒しに行こうと私はいつものように手下達・・・もとい男の子たちを

誘ったのだが・・・。

誰も来ようとはしない。

そして・・・。

「ねえイシユラ、モンスターに手を出すのはやめようよウサギ狩りが鹿狩りにしようよ」

私の一の子分で、私の言う事をなんでも聞くはずのダラックが、皆を代表するように言った。

私はその一言に苛立ちを覚え一人でモンスターの居る森の中へと入っていった。

ちなみに私は前にもモンスターを倒した事がある。

あの時は偶然森の中でジャイアントアントというアリのモンスターを見つけ、

私はウサギ狩りや鹿狩りのためにもっていたボロボロの剣をつかって突撃し、

男の子達の援護を受けながら倒したのだ。

それからというものはモンスターを倒したときの高揚感を忘れる

事ができず。

14歳の誕生日にかこつけて今日この森の中に入った。

そして、前回倒したジャイアントアントが居た場所まで獣道を歩いた。

見覚えのある風景になり、警戒しながら進むが目的のジャイアントアントが見つからない。

しばらく歩いた私は休憩するために木の幹に剣をたてかけ休みを取る。

休憩を終えた私はそのまま進み森を抜けるため歩き出した。

この森を抜けると草原が広がっている・・・らしい。

その名も葉擦れの草原。

ジャイアントアントがよく出現するので大人たちが絶対に近づいてはいけないと言われている場所だ。

そして、午前中歩き続けた私はその草原に辿りついた。

「わあ・・・！」

私は草原の風景を見て、感動の声を上げた。

なんて清々しい風景！なんて心地いい風！胸をすくう爽快な景色だった。

私はもう今日はモンスターに会えなくてもいいとさえ思えた。

ここまで来る勇気のあるものしか見えない、素敵な風景。

これだけでも大きな収穫だった。

帰ったら子分たちに自慢話ができる。

気分を良くした私は、そのまま草原を歩く。

どれほど歩いた頃だったか・・・。

日差しが強くなり、そろそろお昼ね、持って来たお弁当を食べるかな・・・と思ったとき

背後でわずかな音がした。

私は足を止め、ゆっくりと振り返り目を凝らす、しかし何も居ない。

いや！何か居る！一面に草が生えていて良く見えない何かが。

そしてそいつは突然立ち上がった。

そいつはジャイアントアントじゃなかった。

六本ある足の四本を使って立ち上がったそいつは、私を見下ろすほどの大きなモンスターだった。

そいつの頭上に表示されている名前はガードアント！

私は息を飲んだ、こんな至近距離になるまで巨大なコイツに気づかないなんて！

私を見下ろすガードアントはジャイアントアントなんて比べ物にならないくらい威圧感を放っている。

来るんじゃないかと後悔したけどもう遅かった。

キイイイ！！

モンスターは恐ろしい奇声を上げ、私は悲鳴を上げて逃げ出した。

全力で走っているのだが、後ろからシャラ、シャラとガードアントの足音が一向に消えない。

それどころかさつきよりも近づいてきているような気がする。

剣が重い・・・捨てて走らないと！

私は剣を捨てようとしたのだが、緊張のためか指が固まって剣を離さない。

そして、後悔が津波のように押し寄せてくる剣なんて持たなければ良かったと、

良かったと、

モンスター退治なんて来なければよかったと・・・。

その後、私の足に限界が来て盛大に転んでしまう。

転んだ拍子に指の筋肉が緩み剣がすっぽ抜けてしまった。
ヤツの足音がなくなり私はヤツの影にすっぽりと入ってしまった。
怖くて振り返る事ができない。

そんな時

「うつわ！なんだあれ！？モンスターか？モンスターだよ！つか
キメエ！実際に間近で見えると

キモすぎる！僕、昆虫苦手なんだよ！地球防衛軍のアリの大群もダメだったし！ましてや、リアルゴキブリとかダメだからホント！」

誰か人がいる！その声を聞いた私は正気づいて、残された気力を振り絞り助けを呼んだ。

「助けて！助けてー！！！」

それから起きた事を私は一生忘れないと思う。

姉さまぐらいの男の人がどこからともなく現れて、ガードアントの前に立った。

そして・・・。

「飛天御剣流・・・」

そう一言、たったその一言を聞いた後ガードアントは横に真つ二つに切れ青い体液を撒き散らす。

そこで、男の人がいつの間にか抜いていた刀をみて切ったのだと理解した。

そして男の人が私に振り返った。

男の人は長髪でかなりの美青年だった。

「平気か？」

「あつ、はい！」

優しい瞳で私に聞いてくるその人に私は返事をするのだから緊張で変な感じになってしまったが

せめてお礼だけでもちゃんと言おうとしたのだけど・・・

「兄さん・・・」

私がお礼を言おうとした時黒い服に金のボタンという珍しい格好をしている男の人がいた。

つて、兄さんって誰？この人のこと？

「なんで兄さんがここに？」

黒い服の人のお兄さん、頭上にはキヨウと表示されている。
キヨウさんは振り返り弟さん・・・ユーゴさんを見る。

「勇吾それじゃあお前はなんでここに居る？」

「俺は『ギヤスパルクの復活』をプレイしていたらここに・・・」

あれ？私蚊帳の外？

二人の雰囲気私に戸惑っていると・・・。

「あ、京介さん！京介さんもここに来てたんですか！？」

うおっ！このモンスター、恭介さんが倒したんですか！？それにこの子現地人！？NPC

ゲームの中の人？もしかしてイベントですか？恋愛フラグ立つんですか？」

彼らの肩越しからメガネを掛けた小柄な男の人が見え、なんかすごく喋り始めた。

さっきのはこの人だったんだ・・・。

そいえば私が襲われていたときもワケの解からないことを喋っていたような気がする。

「あ、君大丈夫か？」

話が終わったのかユーゴさんはキョウさんのことをチラチラ見つ
私の状態を聞いてきます。
私は自分の体を確かめ

「大丈夫みたいです」

と、答えた。

もしかしてキョウさんとユーゴさんは兄弟なのに仲が悪いのかな？

3話 アルダ村

ーキョウ視点（京介）ー

勇吾いやユーゴはイシュラという少女に駆け寄り無事を確認している、

どうやら怪我はしていないようだ。

「えっと、旅の方・・・ですか？見かけない服装ですけど」

「そんなところだ、あつ、この剣返すよ」

ユーゴは片手に持っていた錆付いた剣をイシュラに渡した。

「それにしてもキョウさんって強いんですね！あんな大きなモンスターを一瞬で倒すなんて！

しかも一撃ですよ！！」

調子が戻ってきたのか、イシュラは俺に凄いだのなんだの褒めてきた。

夢と分かっているでも嬉しい半分夢である事が寂しく感じてしまう。

「そうでもない」

だから調子に乗らず無難に応えた。

「こんな事を頼むのは失礼かもしれませんが、ステータスウィンドウを見せてもらってもいいですか？」

「問題ない」

ステータスウィンドウの出し方を知らないのに美少女に頼まれたから思わず返事をしてしまった。

って俺のバカああああああ！！

どうすんだよ、かつこつけて問題ないなんていつて！！出せなかったらかなりかつこ悪いじゃん。

しかし、もう撤回は出来ない！！頼むステータスウィンドウ様光臨してくれーーーー300円あげるから！！

俺は目をつむり、もう凄いくらいステータスウィンドウよ出ると願った。

すると・・・。

「えーーーー！！何なんですかこれ！！凄すぎる！！LV192ってなんですかーーーー！！」

イシュラの絶叫が聞こえた。

あれ俺ってLV47だったはずなんだけど・・・。

もしかしてこれも夢補正？俺の願望？

少し自分が情けなくなってきた、それは自分は中二病だとは思っていたさ

でも、ここまでイタイやつだったなんて・・・。

「ににに、これって！あああ、あの」

どうやらLVが天元突破している事でかなり動揺している様子の子のイシュラ。

ごめんねキモオタで・・・。

「凄すぎる！キョウさんって一体何者なんですか！？」

おや？まさかのドン引きではなく尊敬ですか？
さすが俺の夢、都合がよすぎだな。

「何者か・・・」

「あ！京介さんだけじゃないから！！僕らもかなり凄いだから！
！見て驚いちゃってよ」

俺が何者か応えようとしたらシヨウの奴が俺に負けじと自分のLV
自慢を始めた。

ユーゴはそんなシヨウにそそのかされLVを見せる。

二人とも俺の本来のLVより強いじゃん・・・。

それからしばらくたって、イシユラとユーゴにシヨウと俺の4人で
アルダ村へと向かい始めた。

「ところでユーゴさんとシヨウさんは靴はどうしたんですか？」

イシユラが移動中に質問をして来た、そういえば二人は靴下を履い
てはいるが靴は履いていない。

「ええと・・・旅の途中で盗まれてしまったんだ、盗賊か、さまな
ければ悪戯好きの妖精に
やられたのかな、その時、Gや剣なんかも取られてしまって本当に
参ったよ」

「そうだったんですか、それは災難でしたねそれでしたらぜひあた
しの家に来てください！

粗末な家ですが食事と寝泊りは出来ますので！さあ、行きましょ
う！！」

ユーゴとシヨウはどうやら旅をしている設定らしい。
でも高しVなのに盗まれるってちょっとなさげないか？

二時間ほど歩いた頃だろうか、村らしきものが見えてきたのだが門
のところで怖い顔をした

おじさんが立っていた、ひょっとして門番の人だろうか？

「イシユラ！！」

うおー！！びびった、おじさんが突然大きな声でイシユラの名前を叫
んだ。

「お前という奴は毎度毎度！どれだけ心配させたら・・・おや？そ
の方々は？」

俺達の存在に気がついたおじさんが一時的に怒気を引っ込めて俺達
に視線を向ける。

「そのことなんだけど聞いてよ！あのね私がモンスターに殺されそ
うになった時この人たちが

助けてくれたの！つまりこの方たちはあたしの命の恩人！でね、で
ね、旅の途中で

Gや剣や靴も盗まれてしまって困っているのだからなんとかして、
お願い」

「なんと娘の命を救っていただいたのですか！」

おじさんが俺とユーゴとシヨウを見る。

「どうも、キヨウと申します」

一応俺が年長者だしきちつとしないとな。
お辞儀をして自己紹介をした。

それに習ってユーゴもするがショウはアルダ村すげえとテンション
高くおなじみのマシンガントークをする。
まったくコイツは・・・。

はてさてこれからどうなることやら。

4話 イシユラの最高の誕生日（前書き）

テストからようやく開放されました。

4話 イシュラの最高の誕生日

ーイシュラ視点ー

キヨウさんたちと村に帰ってきた私は門に居るお父様に怒られてお説教が長くなると見た私はすぐさまキヨウさんたちを紹介した。キヨウさんは大人の対応をして弟のユーゴさんもそれになり自己紹介と

お辞儀をします。

しかし、シュウさんのだけは意味不明な事を興奮気味で喋っている。なんでこの人はこんなに落ち着きがないんだろう？キヨウさんやユーゴさんとは大違い。

「では、まずお礼を言わせてください。私はオランダウ、この村で神官を務め、また村長を兼任しているものです」

「そうですか、でもお礼は別にいいです、偶然ですから」

キヨウさんはお礼を言ってくるお父様に謙虚に対応する。改めて思ったけどこの人は冷静沈着で本当に謙虚な人だと思う。まさに大人って感じがしてカッコイイ！！

「この辺りでは見当たらない服装ですが、お三方は旅をしているの
で？」

「旅というより外から来ました」

お父様の質問に答えるユーゴさん。
しかしその答えは意味がわからないもので一瞬私の思考を停止させた。

「は？ 外の世界？」

「えーと、ここって『ギヤスパルクの復活』の中ですよ？ つまりゲームの外から来たという事です」

ユーゴさんの言葉が意味不明だったのはお父様も同じだったらしくユーゴさんに質問をする。

しかし、帰ってきた答えはさっきよりも意味がわからず頭に疑問符をうかべてしまう。

「よく意味がわかりません。ギヤスパルク、とは一体なんなんですか？

聞いた事があるようなような不思議な響きの単語ですが・・・」

「この世界を滅ぼそうとしている大悪魔です。まだ復活はしていませんが」

！？

なんかこの人ともないこといつてるー！

「おい、ユーゴ」

落ち着きを取り戻したのかショウさんはユーゴさんの袖を引っ張りこそこそ話し出す。

何を話しているんだろ？ キョウさんは話さなくていいのかな？

ふとキヨウさんを横目で見ると瞳を瞑りこの場の成り行きを見守るキヨウさんがいた、とても絵になっている。おそろく二人の事を信賴して何も言わないのだろう。

「オランドウさん」

「はい」

話し合いが終わったのかお父様に話しかけるシヨウさん。

「僕等は、大悪魔ギヤスパルクの復活を阻止するために旅をしています。

そいつが復活すると世界が滅びてしまうので、それで端的に言えば、この世界を救うために旅をしています」

「なんと・・・世界を？」

お父様は眉をひそめた。たしかにその気持ちはわかる、私だってそんな事を言うやつは

大ボラ吹きか頭のいかれた人間だと思う。

でも、私はすでにあの途方にもないステータスウィンドウを見てしまったので

二人の言葉を笑い飛ばす事なんて出来なかった。

「お父様、この人たちが言っている事は本当なのかも」

「なに？」

「キヨウさんやユーゴさん、それにシヨウさんは桁外れに強い人な

んだよ。

御伽噺に出てくる伝説の勇者を思い起こさせるほどに。ねえ、キヨウさん、

ユーゴさん、シュウさんステータスウィンドウをお父様に見せてもらえませんか？」

「かまわない」

「いいよ」

「オツケー」

三人がステータスウィンドウを開くと、お父様は私がした同じ反応をする。

目を丸くして、ぽかんとし、驚愕のあまり大声を出す。

「なんですかこの数値は！お二人はゴードスナイトですと？まさか、軍神ゴードスの

祝福を受けた騎士・・・！なんという・・・おお、なんという・・・！

あ、あなた方は何者なのですか？もしや神の使い・・・？」

「そんなご大層な者ではありません。ただのゲーマーです」

ユーゴさんは頭をかきながら返答しますが、げーまー？という単語がよくわかりません。

そんな様子を見ていたシュウさんはユーゴさんのわき腹を小突いた。

「だからさー、それは元の世界の話だろ？僕等は今や、超ド級高Lvのゴードスナイトとウィザードなんだぞ。それらしく

振舞えつて。

ねえ、キヨウさん」

「俺は知らん」

「こほん」

お父様が空せきをして、視線がお父様に集中する。

「ともかく、ここで立ち話もなんです。私達の家へ来てください。何も無い田舎の村でさしたるおもてなしは出来ませんが、精いっぱいの事をさせていただきます」

「お父様ありがとう！キヨウさん、ユーゴさん、ついでにショウさん、

ぜひ家に泊まって！そして旅の話を聞かせてください」

私はキヨウさんの手とり引っ張った。

「世話になる」

キヨウさんは優しそうな表情をして、答える。

本当に、この人はかっこいいなあ。

ともあれ、そんなわけで。

キヨウさん、ユーゴさん、ついでにショウさんは、うちへ来る事になった。

つまり私にとって、最高の誕生日になったってわけ！

5話 (。・。oミ。 おっばい！おっばい！By ショウ

ー ショウ視点ー

僕は、今まで自分の人生で劇的なことは起きないだろうと思っていた。

しかし、僕は憧れていた、剣と魔法のファンタジーな世界に来た。しかもだ！高レベルの魔法使いとしてだ！！実に素晴らしい！！これが興奮してられるか！今や僕は魔法使いなんだ！！

魔法をぶっぱなして、かっこいい所を見せてモテモテに！！なんてことを考えていたんだけど、いざ、チャンスが到来するとモンスターは

画面で見えていたときよりも気持ち悪く、思わず戸惑ってしまった。僕が戸惑っている間にユーゴは剣を拾って少女こと、イシユラちゃんを助けるために、

モンスターに向かっていくが、その先では、さっきまでいなかった、僕の理想を具現化して様な人、巖島 京介さん。

侍のような抜刀の構えを取り、刀を持っていた腕が消えたと思ったら、

いつの間にか刀は振り切られ、数秒経つとアリが真つ二つになった。すげえええええええ！！！！

本当にかっこいい！

僕もいつかあんなふうになりたい！！

そんな感じで、京介さん。いや、ここではキョウウさんか？

まあ、そんなキョウウさんにいい所を持っていかれ、イシユラちゃんの恋愛フラグ

が立ったようだ。

だって、イシユラちゃんがキョウウさんを見てる目がすごいもん。

よーし！僕もキョウウさん見たいに頑張ってフラグを立てるぞ！！

まあ、そんなわけでして。

オランドウさんの後を歩き出した僕は、次こそチャンス逃さないぞ！と意気込む。

そうとも、僕は魔法が付くものは何でもござれの偉大な魔法使いなんだー！！

「さ、こちらです」

「えっ、……これが家ですか？ すごい！ 広すぎるー！！」

案内された僕は目を丸くした。

なんつーか、これって家とは思えないんですけど。
立派な石畳に聖堂？ つーか神殿？

デザイン的にはイタリアの教会のようにも見える。

「いえ、これはファドラの神殿です。

この神殿を抜けたところに私達の家があります」

「そっか。アルダ村には風神ファドラの神殿がありましたっけ。
いやーすっかり忘れてました。それにしても凄い迫力だなー、
テレビ画面で見たのとは大違いだ」

「おや……？ その口ぶり、シュウさんはこの村に立ち寄った事があるの？」

オランドウさんは思い出すように首をかしげる。

「あつと、そういうわけではなく、風の噂に聞いたんですよ」

むっ、この世界の会話はめんどくさいなあ。

日本語が通じるもんだから、ついつい元の世界のノリで話してしま
う。

「由緒ある神殿なんですよ。何も無いこの村では、私達の自慢の種
なんです」

イシユラちゃんが、キヨウさんに言った。

「つか、この娘っこ、キヨウさんにぴったりくっついてるんですけど。」

「そうだな・・・、彫刻がたくさんあって、落ち着いた雰囲気がある」

キヨウさんは神殿を見つめて、褒めた。

それにしてもキヨウさん、代わってくれませんか？

その後、オランドウさんの神殿に関する説明をうけて

僕は、周りを見渡す。

「あれ？記念品とか売っていないんですか？」

何気なく尋ねた僕。

「は？いえ、そのような物は一切・・・」

「いやあ、それでしたら、ぜひ売り出したほうがいいですよ。」

村の宣伝にもなるし、地域が活性化する有効な手段ですからねー」

すると、オランドウさんの顔が陰しくなった。

あれ？もしかして地雷、踏んだ？

「神殿の修復や私達の生活は、すべて浄財によってまかなわれています。」

それに、そのような事はファドラの教えに反します」

そうだったのか・・・。

あれ、何かイシュラちゃんの僕を見る目が冷やかだ。
もしかして好感度が下がった？

「あの、すみません。悪気があったわけではないんです。
僕の故郷ではそれが普通でして」

「なんですと！そんな邪悪な宗教が蔓延している地があるのですか
！」

やばい、完全にドツボだ。

「なあ、少し黙った方がいいぞ？」

僕の隣にいた、ユーゴにたしなめられてしまった。でもってキョウさんの隣に居る

イシュラちゃんはキョウさんとユーゴと僕を見比べて、（キョウさん達、二人はまともだな）

見たいな表情をしている。

しかたがなく僕は黙る事にした。

それからしばらく歩いて、神殿を抜けると、そこには花が咲く明るい庭があり木の家が

あったまるで軽井沢にある、お洒落なログハウスのようだ。

コッココ コケ・・・。

庭にはニワトリが放し飼いにされている。

「おい！ユーゴ見るよ！…ニワトリがいるぞ！…へええ、ニワトリにもHPやMPがあるんだ」

「ニワトリぐらいで騒ぐなよ」

「なあ、なあ、ちょっかい出したら集団で襲ってくるかな？」

「ここは、ゼルダの伝説の中じゃない。それよりも襲われたいのかな？」

「ちえ、ノリが悪いなあ。ん？なんだなんだ、犬もいるぞ！」

庭の隅に狼のように痩せている犬を見つけた。
僕は犬に駆け寄り。

「この犬、何て名前？もしかしてヒューイだったりする？ヒューイ！カモン！
ヒューイ！グッボ〜イ」

ワンワンワンワン！

「うわああああ！！」

犬はうつとおしかったのか、起き上がり、猛烈に吼えまくった。
僕はあわてて飛びのいた拍子に尻餅についてしまう。

「こら、お客様に吼えちゃダメでしょ」

イシユラちゃんが頭を撫でると犬は大人しくなった

「ウチの犬、ヒューイなんて名前じゃあ、ありませんシルバです」

さつきよりも冷ややかな目で見られる。

さらに、好感度が下がったようだ。

「いや、悪気があったわけじゃあ、ないんだよ。
ただ、カプ。ンに・・・」

「やめておけ、説明するだけ無駄だ」

隣にいたユーゴは、やれやれと言った感じで言ってくる。
なんてこつたい。

「それじゃあ、中にどうぞ、お茶でもしましょう」

オランドウさんは苦笑して、戸口にたった。

「レヴィア、開けてくれ。お客様だ」

「はい」

涼やかな声で応じて、扉を開けたのは・・・。

あああああ！キターーーーー！！！！

（。。。）○ミ。おっばい！おっばい！

僕は彼女を見て心に雷鳴が轟いた。

なぜなら彼女はウチの高校のナンバーワンよりも美人で、その上・・・

・。

（。。。）〇ミ。おっぱい！おっぱい！がとても大きくすばらしいー！！

イシュラちゃん同様に、服装が地味だがその分（。。。）〇ミ。

おっぱい！おっぱい！

がすばらしく、いやー、実にけしからん！！

「長女のレヴィアです」

オランドウさんが紹介してくれた。

「どうも初めまして、大悪魔ギヤスパルクを倒すために大冒険をしているミヤモト ショウ

います！世界を渡り、世のため人のために戦い、銀縁メガネの似合う、魔法使いです！！」

僕は勢いよく、自己紹介したのだけど。

「・・・魔法使い？」

レヴィアちゃんは露骨に眉をひそめ、お世辞にも好意的とはいいがたい

目を僕に向ける。

「えっと、あのね、この人は魔法使いでもいい魔法使いだから大丈夫だよ、

たぶん」

イシュラちゃんがフォローを入れてくれるが、たぶんって何だ！たぶんって！

こんなナイスガイはそうそういないんだぞ！！

「お父様！どういことですか。魔法使いを連れてくるなんて！」

レヴィアちゃんは聞く耳持たずに、オランドウさんに食って掛かる。うん、僕ここまで拒絶されたのは、初めてかもしれない。心の中で涙しつつ、成り行きを見守る。

「こら、レヴィア！無礼な口をきくんじゃない！」

この方達は、モンスターに襲われていたイシュラを助けてくれたんだぞ！！

そうだな、イシュラ」

「うん、そう」

「・・・」

「すみません。娘は魔法使いと少々揉め事が、過去にありまして」

「じゃあ、レヴィアさんこれだけは言っておきたいんだが」

ユーゴが割って入ってきた、そして・・・。

「シヨウは、俺の友達だ。魔法使いと言っただけでそんな態度をとらないでくれ」

ユーゴ！本当にありがとう！！

しかし、キヨウさん。貴方は反論してくれないんですか？僕はさっきから黙っている、キヨウさんを見る。

5話（・・・）〇ミ。おっばい！おっばい！BYンショウ（後書き）

どうも皆さんお久しぶりです。更新が遅れ本当に申し訳ございませんでした。

これからも頑張っていくので応援よろしく願います。

PS：オリジナル小説『まほ×がく』・『異界の魔剣士は演劇部員』を始めました。

評価や感想をいただければ今後のやる気に繋がるのでよろしく願います。

6話 タイトルが思いつかない BYキョウ

ーキョウ視点ー

ギャランドウさん、じゃなかったオランドウさんとユーゴたちが門の入り口で話しているが、正直俺は眠くてしょうがない。ときどき、腕を組み目を瞑ってしまったりしてしまっただが。話は終わり。オランドウさんの家に行く事になった。

何故かイシュラちゃんに手を引かれて・・・。

イシュラちゃんそんなに俺が迷子になるのが心配なのかい？歩きづらいうえに恥ずかしいんだけど・・・。

まあ、これからお世話になるのだから我慢しないといかな。はあ、早く寝たい。

オランドウさんの自宅に向かうと神殿のようなものが見えてきた。すると、ぴったりとくっついていたイシュラちゃんが神殿の自慢をしてきたので。

「そうだな・・・、彫刻がたくさんあって、落ち着いた雰囲気がある」

と、つきなみな事を言った。

そんななんどつでもいいから、早く休ませて欲しい。

正直、芸術よりも睡眠だ。

「あれ？記念品とか売っていないんですか？」

「は？いえ、そのような物は一切・・・」

「いやあ、それでしたら、ぜひ売り出したほうがいいですよ。」

村の宣伝にもなるし、地域が活性化する有効な手段ですからねー」

シヨウとオランドウさんがなにやら話し始めたがシヨウの最後の言葉で

オランドウさんの表情が険しくなる。

何やってんだよ、メガネ！！

泊まりにくくなるだろう！！

「神殿の修復や私達の生活は、すべて浄財によってまかなわれています。

それに、そのような事はファドラの教えに反します」

「あの、すみません。悪気があったわけではないんです。

僕の故郷ではそれが普通でして」

「なんですと！そんな邪悪な宗教が蔓延している地があるのですか
！」

シヨウは言い訳をしたのだが、邪悪な宗教呼ばわりされてしまった。
まあ、別に俺は神とか信仰してないし、別にどうでもいい。

それから、ユーゴに何かを言われて、ようやく大人しくなった。

やれやれ。

それから、また、歩き出して神殿を抜けると、お洒落なログハウス
が見えてきた。

どうやら、あれがオランドウさんの自宅らしい。

鶏も放し飼いにされており、まるで軽井沢のようだ。

「おい！ユーゴ見るよ！！ニワトリがいるぞ！！へええ、ニワトリ
にもHPやMPが

あるんだ」

「ニワトリぐらいで騒ぐなよ」

まったく、シヨウは静かにする事ができないのか？
本当にうるさい。

眠いせいか、いつも以上にうつとうしく感じる。

「なあ、なあ、ちょっかい出したら集団で襲ってくるかな？」

「ここは、ゼルダの伝説の中じゃない。それよりも襲われたいのか？」

「ちえ、ノリが悪いなあ。ん？なんだなんだ、犬もいるぞ！」

おいおい、メガネ。人の家で飼っている動物にちょっかいだすなよ。
あゝ、眠くてツツコムのも面倒になってきた。
早く中に入りたい。

「この犬、何て名前？もしかしてヒューイだったりする？ヒューイ！カモン！
ヒューイ！グッボゝイ」

ワンワンワンワンワン！！

「うわああああー！！」

メガネが懐かしいゲームのネタを披露して犬を呼ぶ。
しかし、犬は不快に思ったのか、吠えまくり、メガネはそれに驚いて尻餅をつく。

本当になにやってんだか……。

「いや、悪気があったわけじゃあ、ないんだよ。
ただ、カプ。ンに……。」

「やめておけ、説明するだけ無駄だ」

シヨウが弁解しようとするが、ユーゴに止められてしまう。
頼むから、そのまま黙っていてくれ。
その後、玄関まで来ると……。

「レヴィア、開けてくれ。お客様だ」

「はい」

ようやく、ようやく中に入る事が出来る。
俺はもう、家の中で休ませて貰う事で頭がいっぱいになった。
それなのに……。

「長女のレヴィアです」

「どうも初めまして、大悪魔ギヤスパルクを倒すために大冒険をしているミヤモト シヨウ
います！世界を渡り、世のため人のために戦い、銀縁メガネの似合う、魔法使いです!!」

この野郎……。

なんかイライラを通り越して殺意さえ沸いてきたんだけど……。

「……魔法使い？」

ん？たしか、長女のレヴィアさんだったっけ？

なんか、メガネの事を露骨に嫌そうな目を向けている。

まあ、あんなに鼻の下を伸ばし、胸をガン見してるんだし、しょうがないか。

たしか、コイツの視線が気持ち悪いと、妹に相談された事があったっけ。

「えっと、あのね、この人は魔法使いでもいい魔法使いだから大丈夫だよ、たぶん」

一応、フォローのようなものが入るがフォローになっていない。

「お父様！どういことですか。魔法使いを連れてくるなんて！」

おお！突然レヴィアさんが怒鳴るからびっくりしちゃったよ。

ていうかレヴィアさん。変態じゃなくて魔法使いの方に反応するんだね。

正直俺は、何でこんな変態を連れてきたのかを言うのかと思っていた。

「こら、レヴィア！無礼な口をきくんじゃない！」

この方達は、モンスターに襲われていたイシュラを助けてくれたんだぞー！！

そうだな、イシュラ」

「うん、そう」

「・・・」

「すみません。娘は魔法使いと少々揉め事が、過去にありまして」

「じゃあ、レヴィアさんこれだけは言っておきたいんだが」

「シヨウは、俺の友達だ。魔法使いと言っただけでそんな態度をとらないでくれ」

はあ、ユーゴ。たしかにシヨウは根っこからこんなに変態じゃない事ぐらいは知っているが、さすがにあの自己紹介を考えたらシヨウも謝らないといけない気がするぞ？まあ、面倒だから言わないが。

プーン

ん？

プーン

俺が騒動を静観していると、蚊が飛んできた。まったく鬱陶しい。

手で払おうとしても、しつこく俺に付きまとってくる。

あー！うっとうしい！

蚊を睨み、思わず刀に手を掛けるが、もう降参したのか蚊はどこかに行ってしまった。

「あの……。キヨウさんどうかしたんですか？」

「いや、なんでもない」

「？」

イシュラちゃんに聞かれたが、蚊がうつとうしかったら思わず、なんて言えない。

俺は、イシュラちゃんに案内をされ家の中に入る。

中に入ると、蚊と戦っているときに中に入ったであろうユーゴたちがイスに座っていた。

「兄さん。なにしてんだ？」

「いや、別に何もしていない」

ユーゴが何か聞いてきたが面倒になり、空いている席に座る。

はぐ眠い。

それからレヴィアさんにクッキーと一緒にもらった紅茶のおかげか、すっかり眠気がなくなってしまった。

おそらく、紅茶からする、ミントの香りのせいだろう。

「お、見る見る！フードの値がちよっぴり回復したぞ」

シヨウがステータスを開いてクッキーを食べるとたしかに僅かだが回復していた。

このフードはキャラクターの空腹や疲労度を表している。減れば減るほど、いろんな値に影響し、本来の力を発揮できなくなる。

これは時間経過と共に減少していくもので、食べたり寝れば回復する。

我が夢ながら、うまく出来ていると思う。

しかし、俺はいつになったら目が覚めるんだ？

「本当だ、しかも味があつておいしい」

「このクッキーは、私が作りました。お母様から作り方を教えてもらつたんです」

ユーゴの言葉に答えて、微笑をするレヴィアさん。確かに美味しい。

クッキーを一つ食べて、心からそう思う。

それにしても、メガネは顔が緩みまくりだな。

まるでしずかちゃんにデレデレするのび太くんのようにだ。

「えっ！なんですか、そのステータスは！」

レヴィアさんの突然の声に驚き。回りも彼女に注目する。どうやら、メガネのレベルに驚いているようだ。

「すごいでしょ！あのね、姉さま。キョウさんとユーゴさん、ついでにショウさんは世界を滅ぼそうと

している悪魔を倒すために旅をしているんだって！何かとんでもない話だけど、でも、

このステータスを見ると本当なのかも」

なにそれ？俺は初耳なんだけど。

もしかして夢の設定ですか？

「LV58・・・？キョウさん、ユーゴさん。あなた方のステータスも見せてもらつていいですか？」

「ええ。これです」

「ああ」

俺とユーゴはレヴィアさんに頼まれ同時にステータスを開く。

「なんてこと！LV78にLV192つて、人間離れしている！！」

なるほど、彼女から見たら俺達は人外のバケモノなのか・・・。

「キョウさん、凄く強いんだよ！私に襲い掛かるモンスターを一瞬で倒しちゃったんだから！

カッコよかった」

「その事なんだが、イシユラ」

イシユラちゃんが思い出すように話しているとオランドウさんがまじめな顔になり

イシユラちゃんに話しかけた。

「名の知れる悪党」

俺はとある店で報酬額のいい、誘拐のクエストを見つけた。

そして現在クエストのターゲットである、レヴィア・アローネ、オランドウ・アローネを監視して、誘拐するタイミングを見計らっている。

しかし、ここで邪魔者が現れた。

黒く長い髪に刀を持ち、ドラゴンのような目をした男が居た。

俺は、アイツはやバイと本能的に察知してアイツがこの村を離れた

ときに誘拐しようと

計画を変更した。幸い、期限は一週間だ。

俺は、息を潜め離れようとした時、奴がターゲットの自宅前で突然俺のほうを睨み刀に手を掛けた。

やばい！殺される！！

命の危険を感じ取った俺は、奴から逃げるために全力で走った。

かなりの距離を走った俺はいつの間にか森の中に居た。

近くの木に背を預け、息を整える。

くそ！冗談じゃない！！きっと俺の存在はバレ、俺を捕まえに来るだろう。

そうなる前に、クエストの契約を破棄して、さっさと逃げよう。

奴が来る前に！！

携帯していた、水を飲み、俺は再び走る出す。

願わくは、あんなバケモノにもう出会いませんように、と願いながら……。

7話 命の責任

ーキヨウ視点ー

「親に黙って、モンスター退治に出かけるとは何事だ！

お三方が通ರಿかからなかったら死んでいたんだぞ！わかっているのか！」

真剣な顔をしたオランドウさんはイシユラちゃんをお説教を始めた。

まあ、自分の大事な娘だし、怒って当然だな。

そう思った俺は黙って紅茶を飲む。

「ごめんなさい。でも、お母様はモンスターに襲われて亡くなったんでしょう？」

だから私は、モンスターを撃退するくらいの力が欲しい。

そのためには経験とLVを上げないと。そうでしょ？」

おいおい、さすがにその態度はいかんだろう。

反抗期か？

「母さんの事をだしにするんじゃない！！

・・・まったく、誰に似たんだか・・・」

「ちょっと待って、イシユラだけではなくお父様にも聞きたいわ。

イシユラはどうして一言も無く行ったの？お父様は何で私に黙っていたの？

話を聞いていたレヴィアさんは、目を鋭くして二人を睨む。

「・・・だって、姉さまに言ったら絶対に止められるし・・・」

「それはそのう、私は心配するのは自分だけで十分だと思って・・・」

睨まれた二人はおろおろと言い訳を始めが、レヴィアさんは顔が怖いまだ。

しかし、オランドウさん。この様子を見る限り、イシユラちゃんは貴方似ですよ。

「まあまあ！二人のいう事も分かるし、レヴィアちゃんも怒るのも当然！」

どうか、この僕の顔に免じて矛を収めてください！！」

仲裁に入るメガネだが視線はずっとレヴィアさんの胸をロックオンしている。

下心丸出しだな・・・。

「お客様の前でお恥ずかしい所を見せてしまい。申し訳ございません」

オランドウさんは軽く頭を下げ俺達に謝罪した。

「あ！そういえばそのモンスターの事なんだけど！」

「ん？どうしたね？」

「わたし、ジャイアントアントを狩ろうと、森を抜けた草原にいったんだけど」

「なに！？そんなところに行っていたのか！？」

「ごめんなさい。でもそこで出くわしたのは、ジャイアントアントよりも大きいモンスターで、名前はガードアントって表示されていた、たしかあれって巣を守るアリじゃなかった？」

それを聞くとオランドウさんは、壁際にある本棚に向かってすつとんでいき、一冊の分厚い本を取り出し、凄い勢いでページをめくっている。

「あつた！これだ！！」

ドンと本を机に置き、開かれているページにはガードアントの絵と日本語で説明が書いてある。

「ガードアント……。卵を産むクイアントが巣作りが始まると周囲を警戒する大アリでジャイアントアントよりもはるかに強いと書いてある。いかん、いかんぞこれは！

草原にクイアントが巣を作っている！

となると、数カ月後にはジャイアントアントが大発生する。急いで対策を立てないと」

確かにそれは大変だ。

まあ、俺が行けば大丈夫か。

同じ事を思っているのかユーゴが口を開き始めた。

「そついうことなら任せてくださいよ！」

口を開き始めたユーゴだが、メガネに察知されセリフをとられてしまう。

まあ、どっちが喋っても同じだし、いいだろう。

「クイーンアントの取り巻きアリ軍団なんてこの、このウィザードシヨウの前では

雑魚ですよ！そう、スペラ。カー先生ぐらい雑魚ですよ！まあ、これも世界を救う一環という事で、
一肌脱ぎましょう！！」

「で、ですがアルダ村はあまり裕福な村ではなく、
あなた方のような高レベルの人たちを雇えるお金はありません」

「いーんです、いーんです！どうせモンスターがGを落としますし。
ロハで！タダで！無料で！お受けします！な？」

テンションがうざいが、ユーゴと一緒に無言で頷く。

「それはありがたいのですが、本当によろしいので？」

話がうますぎると思っているのか怪しんでいる目つきで俺達を見る。
なんかやる気が若干無くなってしまった。

「モロチンです！あつ間違えました、モチロンです！旅は道連れ世は情け、

こうしてアルダ村に来たのも何かのご縁！ゴースナイト二人とウィザードの名トリオに

よる世直しお助け道中記に新たなページが今加わる！
お任せください！ぜひ、お任せください・・・！！」

「おお！でしたら是非お頼みます！この通りです！」

先程の疑いの目はなくなり、笑顔で頭を下げるオランドウさん。
しかし、ここでメガネが怪しい動きを見せる。

レヴィアさんとイシュラちゃんにニヤニヤ顔を向けたのだ。

「あ。もしかしたら、イシュラちゃんとレヴィアちゃんも一緒に
ませんか？

ちなみに危険なんてないから！超高LVの魔法使いと騎士が付いて
いるから！」

やっぱりか……。

大方このメガネはモテたいが為にいい所を見せたいのだろう。

「え！？本当ですか！ぜひ一緒に一緒にさせてください！」

どうやらイシュラちゃんは落ちたようだ。

メガネはなんか、計画どおりと言う感じでニヤリとしている。
殴ってもいい？

「うんうん。アリの巣はいいよお、ジャイアントアントがいっぱい
居て経験地が

ざつくざつくだからね！LVUPすると美容にもいいっておばあち
やんが言ってたし

この機会に僕らとPTを組んで突撃だー！」

すげえ……、お前は立派な三流詐欺師になれるよ。
なんだよ、美容にいいって、絶対に言っていないだろ。

「イシュラ！何て事を言い出すの！私達が付いていったら足手まと

いでしょう!!」

レヴィアさんがもっともなことを言う。

まあ、当然こうなるよな。

オランドウさんも意見が同じなのかウンウンと頷いてる。

「いやいや！そんなことはありません！誰にだって最初の一步があるんです！

その一步を踏み出さないと変わらないんです。勇気を持って踏み出せば道は開ける！

それが人生つてもんです。なあにこのウィザードショウが責任を持つてお守りします

から！さあ、どうですか、どうですかあゝ。

あなたはだんだんアリの巣に行きたくなってきたゝ」

おいおい、そんな気持ち悪い説得で来るわけがないだろ。

まったく、頭がおかしいとは思えな・・・。

「最初の一步・・・」

あれ？もしかして今ので行きなくなったの？

もしかして洗脳された？

「姉様！ここまで言うてくれるんだもん、私は行くよ！

もう、決めたんだから!!」

イシユラちゃんはそう言うのと、ぬるくなつたお茶を一気に飲みプハ
ーと爽快感が

あふれる笑顔を見せた。

ちよつと待ってー！俺は命の責任なんてとれないよー!!

「あのう、お父様」

レヴィアさんはためらいがちに話を切り出した。
え？まさか……。

「その……、イシユラだけだとお二人にご迷惑を掛けるか心配なので
私も一緒に行ってもいいですか？」

「なんだと！」

レヴィアさんの反応が予想外だったようで、オランドウさんは絶句している。

まあ、そうだよ、レヴィアさん大人しそうだし。

「いいじゃないですか、お父さん。かわいい子には旅をさせろ、ですよ。」

箱入り娘にしておきたいおとうさんの気持ちはわかりますが、でも、鳥はいずれ自分の翼で巣を飛び出していくものです。
どうしても気になるのなら、お父さんもどうですか？」

「うーむ……むむ……」

おいおい！そこで悩んではダメでしょう！！
しかも、このメガネはさりげなくお父さん呼ばわりしてますよ！
明らかに娘さんを狙っている変態ですよ！！

「基本的にモンスターとは俺が戦います。様子を見ながら少しずつ進んで、

二人が足手まといになるようなら、いったん引き返せばいい。
シヨウの言う通り、大丈夫だと思いますよ」

おいおい！思うじゃだめだろ！思うじゃ！

「うーんそこまでおっしゃるのなら・・・」ちよつと待つてください」

俺はオランドウさんの言葉を遮りユーゴとシヨウを睨む。

ユーゴは分かっているようだがシヨウはどうして止めるの！？みたいな目で見ってくる。

「お前ら、調子よく責任と言っていたが覚悟があるのか？

責任を取る覚悟が、それが無いのならこの二人は連れて行けない、あるのなら連れて行け、そのかわり、命を懸けて二人を守れ。
以上だ」

「ちよつと、キヨウさん大丈夫ですよ！俺達三人居れば平気ですよ
！！」

「・・・」

こいつ、俺の言った事を理解してる？

7話 命の責任（後書き）

感想お待ちしています。

8話　もしかして夢じゃないのか？+新たなチート

ーキョウ視点ー

これ以上話をして無駄だと思った俺は、外に出た。

別にあの二人が嫌いなわけではないのだが・・・。

命に対する認識が甘いというか、なんというかで・・・。

まあ、しばらく模擬刀を振り回していれば、すっかりするだろう。
俺は模擬刀をスラリと抜く。

ドクン！

「は？」

一瞬の鼓動を模擬刀から感じたと思ったら、俺は真っ白な空間にいた。

何だこれ？

「おお！やつと通じたか」

「おっさん誰？」

とつぜん、黒いおっさんが現れ、なにやら喜んでいる。
何この人？こわい。

「私は、お前の持っている刀だ」

「はあ？刀？これ模擬刀なんだけど・・・」

まったく、このおっさんは中二病かと突っ込みたいところなんだけど、

この空間に居る俺は、少し本当かも？と思ってしまった。

「いや、たしかに模擬刀の棚に入っていたけど本物だぞ」

「まじ？でも、全然切れなかったような」

「ああ、俺が切らせなかったからな。
その証拠に、あのアリは切れただろ」

まあ、たしかにおっさんの言う通りなんだけど・・・。

「じゃあ、なんで部屋に居たときは切らせてくれなかったんだ？」

「いや、あんなものを斬ってもしょうがないだろ」

まあ、たしかにサンドバックを斬ってもしょうがないか・・・。
しかし、この夢超展開になってきたな。
もしかしてここで、俺に何か強い力が！！？

「さて、そろそろ本題に入るか・・・。

キョウお前に私の名前を教えてやる」

は？力くれないの？そくだよねそう簡単にはくれないよね。

「何を考えているか想像がつくが・・・。

私の名前は刀の名前、私の名前を呼べば真の力を発揮する」

え！？まじ！？俺が持っていた刀はそんなにチートだったのか！？

夢だけだ。

「一つ目は・・・斬月。二つ目は・・・」

「ん？何で二つあるの？」

「一つ目は始解。二つ目は卍解。

卍解は始解よりも数倍に強くなれる」

なに！？ただでさえ、チートのそれ以上を行くだと！？

なにそれ、面白くね！？

「使いたい時は呼べ、お前の意識が戻るとき、私の使い方をマスターしているだろう」

おっさんがそういうと、急に視界が暗転して、アローネ家の庭に居た。

そして、頭の中に使い方が思い出すように浮かんできた。

うわ、初めて始解するときこんな恥ずかしいセリフを言わないといけないの？

まあ、代償だと思って諦めるか。

「兄さん」

「ん？」

アローネ家の扉が開きユーゴが出てきた。

なんだろ？さっきの事か？

「兄さん、ごめん。俺とシヨウは少し調子に乗っていたのかもしれ

ない。

ゲームの世界だから大丈夫、なんて勝手に思い込んでゲームの中の人にだって命はあるのに」

「気づけたのなら、別に問題はない。

あの姉妹は結局どうする事になったんだ？」

「連れて行くことになった。

もちろん、俺やショウウが命を賭けて守る」

「わかった」

そう会話をした後、オランドウさんに案内を受け、客間で眠る事になった。

夢の中で寝るなんて・・・。

少しこの夢が実は現実なんじゃないかと、不安になった俺だった。

9話 飛天御剣流

ーキョウ視点ー

さて、朝になり目を覚ました俺とユーゴとシヨウ。昨日の広間で食事を取っているのだが・・・。

「うま！やっぱうまい！いくらでも入っちゃうよ！レヴィアちゃんの料理最高！」

まったく、朝からテンションの高い奴だ・・・。そのテンション10%くらい分けてほしい。まあ、シヨウの言った通りうまい。

「確かにうまい」

「ああ、昨日も食べて胃がもたれると思ったけどそうでもないな」

「そうですか。それはよかった」

につこりする、レヴィアさんだけど・・・。

なんだろう、凄く不潔なものを見る目でシヨウを見ている。たしかに、あのおっぱいを貰くがごとく放たれる視線は確かにづらい物が

あるからな・・・。

「レヴィアさん。不快な思いをさせてすまない。」

俺達はアリ退治が終わったからこの村を出て行く」

「!？」

「え！？キヨウさん出てっちゃうの!？」

おや？なんでそんなに驚いた反応を？

イシユラちゃん俺が出て行くことを聞いた瞬間、目をこれでもか！
って思うくらい見開いちゃってるし・・・。

あれ？レヴィアさんも何故俺を凝視してるんだい？

「ええ！キヨウさんマジっすか！？僕は残りたいって言うか・・・な
んというか・・・」

シヨウは下心まるだしの意見をする。
まったく。

「さて」

食事が終わり、オランドウさんがお茶を飲み終わると話を切り出し
始めた。

なんだろう？

「実は昨晚のうちに、村の青年団と話し合ったのですが、
何人が同行させてもよろしいでしょうか？」

なるほど、性欲の化身であるシヨウから娘を守るための処置か。
別に問題は無いし、人手が増えるのはいい事だ。

「拒否する、理由ありませんし、いいですよ。」

兄さんもいいよね？」

「ああ」

「おお！承諾していただき、ありがとうございます。

なに、お三方を信用していないわけではないのですが、青年団達にも経験させておけば

後々役に立つかと思ひまして」

おや？もしかしてオランドウさんこの発情しまくっているモンキー
シヨウの

視線に気づいていないのか？

シヨウもシヨウでやめようぜ・・・。

まあいいや、日課の素振りでもやるかな。

「おや？キヨウさんどこへ？」

「外で体を動かしてきます」

「そうですか、だったら村の広場で振るうといいですよ」

「ありがとうございます」

「レヴィア、イシユラ。案内して差し上げなさい。

私は、ユーゴさんとシヨウさんと一緒に靴を見に行くから」

「はい」

「うん！」

こうして、広場に案内される俺。

どうやら、訓練するスペースもあるようで木刀や木人のようなものがある。

さて、じゃあ、素振りでもするかな。

「二人ともありがとう。道も覚えたしもう帰ってもいいよ」

「あの！キヨウさんが修行する所を、見せてもらってもいいですか？」

「あの・・・わたしも」

「かまわないよ」

俺の素振りなんか見てもしょうがないんだが・・・。

まあ、彼女達のような美女や美少女に頼まれたら断れないのが男。しょうがないと思い、刀の柄に手を掛けて、目を瞑る。

どうしよう、何をやればいい、ヘタなものは見せられないぞ。

じっとしている事、30秒。

やる技は決まった。

でも、出来るかどうか不安でしょうがない。

だが、天翔龍閃が出来たんだ。

たぶん出来るはず。

俺は目を開き、抜刀する。

「飛天御剣流！九頭龍閃！！」

九つの斬撃を、一瞬で放つ俺。すげえ！

出来た！出来ちゃったよ！おれ！！

かなり嬉しいが、二人の目がある為、心の中で大いに喜ぶ。

「・・・あの、キョウさん。今なにをしたんですか？
よく分からなかったんですけど・・・」

「私も」

おや？二人には視認する事が、出来ていなかったようだ。
まあ、たしかに常人には無理だよな。
という事で何をしたのか説明し、斬ってもいい木人を斬った。

「す、すごいです！本当に9つに斬れています！さすがです！！」

「本当にすごい・・・」

イシユラちゃんとレヴィアさんは今のを見てかなり興奮しているようだ。

イシユラちゃんは解かりやすいけど、レヴィアさんは目を見開いて、かなり驚いていますという表情で俺を見ている。

他の技も見せてほしいと頼まれたが、ユーゴ達を連れた、オランダ
ウさんが

やってきたため中断となった。

さて、いよいよアリ退治だ！

10話年長者が居る場合は、言葉に気おつけよう。

ーレヴィア視点ー

「おいおい村長、そいつらか？ 凄腕の旅人って？」

青年騎士団の団長を務めるジャツコーさんが待ち合わせ場所で眉をひそめて

一言言いました。

たしかにジャツコーさんのように腕が太く、力強い山賊のような風貌を

しており、見た目だけならキョウさん達よりも強く見えます。

「そうだ、まあ、ステータスウィンドウを見てもらえばわかることだ」

後ろに控えていた、キョウさん達三人が、ステータスウィンドウを開くと

みんなの顔つきが一瞬で変わりました。

予想済みの反応だったので、笑う事はありませんでしたが、こらえるのに苦労しました。

「すげええええええええええ！！」

「LV192つて・・・ありえねえ・・・」

「なんてこった。三人とも俺よりも若いのに・・・」

「すげえ・・・ドラゴンを瞬殺できるんじゃないか？」

見送りに来ていた、団員の家族もざわついて、ちょっとした騒ぎになりました。

「まあ、そんなわけなんで、さっさと行きましょう」

シヨウさんが颯爽と歩き出します。

「いや、ちよつとまった。ユーゴ・・・さん、あんたが騎士様だと村長から聞いているが武器はもたないのか？」

たしかにジャッコーさんの言う通りユーゴさんは武器をもっていない。

「まあ、STRが高いんで素手でも大丈夫ですから」

「いやいやいやいや！いくらなんでもそれじゃあ、格好がつかんだろ。」

おい！誰かこの方に剣を貸してくれないか！

「おつ！ならぜひこれを使ってくれんかのう。貸すのではなく進呈したい。」

こんなすごい人に使ってもらえるなら剣も本望に違いない」

鍛冶屋のゴード爺さんが自分の剣をユーゴさんに差し出します。

あの剣はお爺さんが自ら鍛えたものです。

鍋や釜をつくるのがお爺さんの専門で、武器専門の鍛冶屋ではあり

ませんだから、普通の剣よりもいささか不恰好で、切れ味もたいしたことありません。

以前、お爺さんが自慢するので間近で見せてもらったことがあります、攻撃力

はたったの15、これといった特殊能力もない、ただの剣。

しかし、お爺さんにとってはわが子のように大事な剣なのです。

「ありがとうございます」

ユーゴさんはお辞儀をしてお爺さんから剣を受け取りました。

そして、数歩離れて、鋼で出来ている重い剣をまるで棒切れのように軽々しい動作で振りました。

イシユラが「すごい」と呟きました。

「よーしー！それじゃあ、レッツラゴー！ー！！！」

シヨウさんが、謎の掛け声を叫び歩き出しました。

そして、草原まで歩くと、近くに歩いていたキヨウさんが後方を警戒しているのか

後ろを時折チラチラ見だすようになりました。

彼ほど強い騎士となると、警戒は必要ないのでしょうが、恐らく私達を守るためなのでしょう。

私は、彼の優しさ感謝しつつ、考えました。

食事の時、私の目を見て、出て行くといった彼。

あの時の私は笑顔を浮かべていたはずなのに、私が嫌がっている事を見破られてしまった。

彼にとっては私のような弱い心を持った人間の心を読むのがぞうさないのか・・・

もしくは、私と同じような思いや経験が……。

ーキョウ視点ー

やべーよ、迷子にならないか不安だよ。

オランドウさんや青年騎士団を率いた俺達は、現在森の中を進んでいる。

しかし、森の中と言うのは、意外と不気味でちらほらと動物の白骨死体や、

野良犬に食われたのか、無残なウサギの死体などがあつた。

少し、不気味すぎじゃね？

という事で、オランドウさん達の道案内は信用できるが、不気味な死体を見てしまった

俺にとつては何時、迷子になってもおかしくない状態に見えるわけ……。

ついつい、後ろをチラチラ見てしまう。

おや？

後ろを歩いていた、レヴィアさん。

なにやら、考え事をしているようだ。

おそらく、あの歳の子にみられる思春期の悩みというやつだろうか？
よし！ここは年長者として悩みの相談をしてあげよう。

「おい！アレを見る！ガードアントだ！！」

草原に入り、ジャッキーじゃなくてジャツコーさんがガードアントを見て叫んだ。

確かに、遠目で見ても、わかる黒くでかいアリが二匹。

警戒しているのかうろうろしている。

「なんということだ。イシユラの言った通りだ。つまり草原にはア

リどもの巢が・・・」

緊張しているのか、オランドウさんの声がかすれている。それにしてもこの間も思ったが本当にリアルだな・・・。

「ここから先は危険だ。PTを組んでいく。それ以外のものは村に引き返してくれ」

おやおや。弟よ何時の間にそんなに成長して・・・。

しかしだ、年長者がいるんだからもう少し考えて話そうな。

お兄ちゃんちよつとイラツと来たよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8337t/>

アニオタのろーぷれわーど

2011年10月16日15時05分発行